

山と博物館

第10巻 第1号 1965年1月25日 大町山岳博物館



「ヤキトリ」と「焼鳥」

信州の冬は長い。夜がふけるにつれて寒気もきびしくなる。街路樹をつつむように積った雪が街灯にキラリと光る。そんな時、こたつに入り熱燗で一杯やりながら、歯に沁みるような野沢菜の漬物をつつくのも信州ならではの味である。

冬の味といえば、鴨や小鳥の味がある。一頃前までは、ちょっとした小料理屋でも、小鳥を注文すればツグミがタレをつけてでてきたものである。だが、ツグミが狩猟法で捕獲が禁じられている事を知らずにいた人も少なくなかったのではないかと思う。

昨今ではツグミなど冬鳥が目立って少なくなってきた、その上取り締りがきびしくなり、カスミ網による大量捕獲ができなくなった。

しかし、いぜんとして「焼鳥」が現われている。これは現地補給ができなくなれば比較的取り締りのきびしくない所から輸入するからである。

又、この輸入も以前は羽毛がついたまま運ばれていたが、この頃では羽毛をむしり取られて赤裸にされたものが輸入されているとの噂、チョット見ただけではスズメかツグミか見わけがつかない。手がこんできたものである。小鳥を「ヤキトリ」にして食べたところで、急に長生きをするとか、スタミナがつくという話は聞いた事がない。この際「ヤキトリ」は獣類の内臓でガマンしてもらいたいものである。

(千葉彬司)

冬の黒沢尾根

64 12 29 65

12の記録 降旗多

一、黒沢尾根について

遠見尾根の小遠見山に立つて南に目を向けると、天狗山を経て更に南に延びる、一度は歩いてみたいと思うような立派な尾根に気付くに違いない。地図(五万分の一)の地形図大町で分るように、鹿島国際スキー場から天狗岳(一九二六・七m)を経て小遠見山(二〇〇九m)に続くこの尾根は、傾斜こそ緩いが小遠見山から五竜岳の距離の二倍はある長い尾根である。しかし、右手には青木湖が見え左手には鹿島槍ヶ岳を中心とする後立山の著名なバリエーションルートが、手に取るように望まれ、素晴らしい眺めである。この尾根の一部は、夏には、ハイキングコースになっており上部二ヶ所程指導標がつけられているが一般には馴染みの薄い尾根である。さすがに遠見尾根は、遠見銀座と異名をとる位賑わったが黒沢尾根は私達のパーティーだけで極めて静かなものであった。私達(大町山の会)は、三九年度の年末年始の山行で、黒沢尾根から小遠見山へ出て五竜岳に登ったので、その記録を報告してみようと思います。

二、計画と準備

この尾根が計画されたのは、夏山も終りの頃である。年末年始の山行では、冬山は初めての人に参加するし、長い尾根に加えて豪雪地帯なので、安全の面から極地法によることにした。黒沢尾根のトレースが主目的であるが、出来れば五竜岳登山も併せ行ないたいため、一六〇〇m附近にB C 天狗附近にC I

小遠見山附近にC2を出すことにした。

十一月、十二月、二度の偵察を行ないB C地点まで荷上げを行なった。参加者リーダー以下八名、先発隊七名、後発隊二名である。

三、行動記録

三九年十二月二十九日(入山) (曇後晴) 気温は高いし、一昨日は雨が降るし、曇空ではあるし、何となく冴えない冬山の暮明けである。今日入山は七名、七時発と予約したマイクロバスは待てど暮らせど来ない。とうとう八時まで待たされてしまった。

鹿島国際スキー場まで道に雪がなく、今年も昨年と同じく雪が少なくかと思うと少々がっかりする。スキー場の好意で遠見リフトに乗せて載き黒沢尾根の取付点、青木湖展望台に着いた時は、既に十時を過ぎていた。

ここから一五四八mのピークまでは、雑木林の中を行かねばならない。何も見えず、しかもこの黒沢尾根一番の急登である。数畳ぎとベタ雪に悩まされピッチが上らない。

しかし、全員ファイトでこの雑木林の急登を登りきり、十二時には一五四八mのピークに着くことができた。ここからは、ブッシュも無くかなりこの頃より出発の時曇っていた空も晴れてきて、いよいよ視界が開け、木間隠れに爺、鹿島が見えてきた。一五四八mのピークを過ぎると、急登が無くなり広いなだらかな斜面となる。その上敷を刈り落葉松が植えられているので、雪の少ないことも手伝ってピッチが上り、一六〇〇mのピークを過ぎ

て更に一時間程登り、一六六五・二mの三角点の下にB Cを設営した。

誰も居ない筈のこの尾根へ三十分程してS岳友会パーティーが登って来て私達の側にテントを張った。降旗、内田の二名は一六六五・二mの三角点に登り明日のルートの偵察を行った。晴れ上がった空に鹿島槍の雄姿が素晴らしい。

記録 青木湖展望台(十時) 一五四八メートルピーク(十一時四十分) 一六六五・二m(十二時十五分) 一六〇〇メートルピーク(十三時) 一六六五・二メートル下B C(十四時十五分) 十二月三〇日(入山) C1、C2設営

(快晴)

素晴らしい天気である。全員快調。今日は、C1設営の日である。七時三十分B Cを出発して一六六五・二mの三角点へ向って落葉松の植えられた広い斜面を登る。昨日のS岳友会パーティーは、私達と前後して元来た道を引揚して行つた。一六六五・二mの三角点から先は、ブナの林にところどころシラビソが生えている広い尾根となり、ともしれば道を間違えそうである。吹雪いていたら厳しい所になりそうである。さすがに昨日とは違い雪も粉雪で、部分的には膝までのラッセルが必要である。

行手に目指す五竜岳そして天狗岳が見えて来た。二時間程歩いて、一寸急な登りを過ぎると、一六八〇mのジャンクションである。

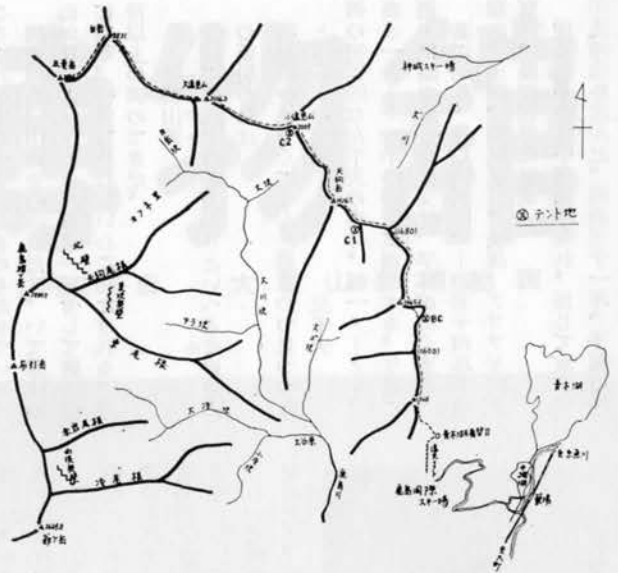
ここで北に向っていた進路を西にかえて、天狗岳に向って登る。今迄広がった尾根が、次第にやせて来て、神城側に雪庇が出ていて雪が深くなるのに加えて傾斜もきつくなり、ラッセルが苦しくなってきた。この辺から黒沢

尾根の核心部である。ひとしきり登り小さなピークに立つと、ここから左手に、大ゴ沢に向って小さな尾根がでている。この辺はシラビソに囲れた平地で絶好のテントサイトである。十一時、ここにC1を設営した。

C1から目前に三角形をした天狗岳、更に天狗岳から南に延びる大きな尾根が見え、爺鹿島は勿論のこと、遠く白馬三山が望まれる。これで一仕事が終わった訳である。C1設営後、今日まで荷上げをしてくれた伊藤が、山を下って行った。しかしまだ時間も早い、風もなく天気は良い。一日も早くC2を遠見尾

一六六五・二メートル三角点より五竜岳





③ テント地

い尾根だと云う。夕方は星の見える空も夜半から風が吹きだし、雪が降り始めた。

記録 BC(七時三十分)一六六五・二メートル三角点(七時五十分)八時二十分一六八〇メートルジヤクタシヨ(十時十分)一五〇分一C1(十時五十分)C1(三時五十分)一五時五十分一三時四十分一西見山(二時五十分)一五時五十分一C1(一六時五十分)十二月三十一日一八五竜岳アタック(曇後晴)

昨夜の積雪は大したことなかったが、山は雲に被れて見えない。C2は行動を起すだろうか。トランシーバー交信が不能なのでどうにもならない。風がないので行動することにした。八時にC1の四名は、C2に向けて出発した。この頃から晴れ

根に出したい。川上をテントキーパーに残し十三時十五分、残り五名でC2設営に出發することにした。まず天狗岳の登りが悪く、C1からナイフリッジが続き、左は大ゴ沢へ、右は神城側の犬川の源頭へ深く切れ込んで

る。

頂上直下は、三〇〜四〇度の傾斜である。天狗岳と小遠見山の間三つのピークがあるが、別に危険なところは無い。いずれも神城側へ切れ落ちているが、鹿島側は比較的なだらかである。相変らず雪が少く荷もC2用だけなのでピッチがあり、C1から約二時間で小遠見山に達することができた。C2の設営を終ると既に四時近かった。もう陽が暮れようとしている。五竜岳アタック隊に渡辺、内田二名を残し、久保田、降旗、唐沢の三名で早々C1に下った。これで私達の計画にめどがついた訳である。皆口を揃えて案外面白

たのだから五竜一小遠見間を五時間半で往復した訳である。それもその筈、遠見尾根は銀座の賑いをみせ、テントは目白押しである。道は完全に踏固められ、夏より歩き良い位である。明日の予定を伝えて、早々にC1に下った。天狗岳まで下ると、C1から後発隊の

武田が我々のサポートに来てくれた。今日武田、小沢の二名がC1に入ったので、C1は六名となった。今日は大晦日、C2の連中は可愛そうだが、楽しい大晦日になりそうである。

記録 【アタック隊】C2(九時二〇分)一西見山(十時二〇分)一白岳(二時二五分)一五竜小屋(二時三〇分)一五竜岳(二時五五分)一三時一〇分一C2(二時四五分)【サポート隊】C1(八時一〇分)一C2(九時五五分)一西見山(二時四五分)一三時二五分一C2(二時四〇分)一三時三〇分一C1(二時四八分)【後発隊】青大湖展望台(九時)一五時四八分一C1(二時三〇分)一C2(二時四〇分)一三時二五分一C1(二時三五分)

始め絶好のアタック日和になった。C2に着くと既に五竜岳アタックに出發していた。アタック隊をサポートするため後を追いつ、西遠見山まで登る。

ここでアタック隊とトランシーバーの交信

ことができ、白岳の頂上にいることが確認できた。それと前後して今日入山する後発隊武田の元気な声が、トランシーバーにとび込んできた。既に一六〇〇mのピークを通過したと云う。今日中にC1に入れる。今日はBC泊りの予定だったので、一日予定が短縮される訳である。後発隊がC1に入れることが分ったので、サポートに久保田が下ることになった。アタック隊が五竜岳に立ったことを確認して、一応C2で待つことを伝えて、元来た道を引返した。C1で待つこと一時間程でアタック隊が元気に帰ってきた。聞けば今朝は九時二〇分に出たと云う。十五時に帰ってき

一月二日一八山下(地吹雪後晴)とうとう一晚中吹荒れて、朝になっても止まない。昨日からの雪は三〇cm位積った。トレースは完全に消されてしまっている。もう黒沢尾根のトレースは全員で行ったし二名は五竜岳へ登った。このまゝここに留まっても仕方ない。予定は明日までだが、とにかく撤収下山することにした。地吹雪の中の撤収は楽ではない。食糧もまだ余っている

ので、入山の時とたいして荷はかわらない。九時三十分下山を始めた。

記録 C1(九時三十分)一六八〇メートルジヤクタシヨ(九時五五分)一BC(二時一〇分)一五時四八分一四八メートルピーク(二時一〇分)一五時四八分一四八メートルピーク(二時五〇分)一青大湖展望台(二時三〇分)

西遠見より五竜岳

(大町山の会)



遂に雪が降りだした。雪の積らぬうちにと今日まで頑張り続けた唐沢が下って行った。雪が積れば、C2の撤収が辛くなるので、今日C2を撤収することにす。昨日と違い見通しはきかず、何とも味けない。積雪は十cm位になり、風も加わってトレースも消されがちである。十二時前にC2に着き、撤収を済ませ、十四時に全員無事C1に集結することができた。この頃より季節風が強まり、テントが破れんばかりに吹きつける。もうここなら少し位荒れても何とか下山ができる。それでもさすがに冬山初めての女性会員二名は、余り顔色が良くない。まだ時間も早いので退屈しのぎに新年会としゃれこんだ。

記録 C1(二時二〇分)一C2(二時五五分)一三時五五分一C1(二時四時)

山の詩歌碑

福沢武一

左千夫歌碑

茅野市北山親湯裏山

茅野駅前発。バスは一時間半の行程を走り続ける。前方に八ヶ岳がはだかつている。頂には雪が深い。曲折の多い山路にとりつき、上りを続ける。背後に見おろされるのは蓼科湖の青。その先は広い傾斜地。

山陰をぬけ、終点までバスを下車。近代風な親湯の建物が映底一ぱいに並んでいる。人に忘れられたような寂けさに包まれて。

ここで左千夫歌碑の所在を教えられる。親湯の裏山の上、雑木の中に碑の頭がのぞけている。あたりは松の疎林。尾根のきわまるところに八ヶ岳の一角が雪をのそかせている。橋を渡る。山路をのぼりだす。いて解けぬかり道に足をとられる。一苦勞して碑の前で。一目でうれしい心に満たされる。期待以上の碑のできた。

蓼科山歌

信濃には八十の群山ありといへど女の神山の蓼科われは

我が庵をいづくにせんと思ひつつ見つつもとほる天の花原

左千夫

例の男性的な左千夫の書体。幅一メートル、高さ一メートル半の碑面に調和する。午後には廻った陽をまともに受け、字体が白く光る。裏に廻る。その銘文は、一昭和十四年十月建之。主催、篠原重喜。後援、アララギ同人真筆、篠原志都児家蔵。

伊藤左千夫は千葉県の子。長じて東京で牛乳搾取を営んだ。明治三十一年、子規の門

に入って本格的な作歌を始めた。三十五歳という晩学だった。子規なき後、アララギを主宰して精力的に活躍した。赤彦を始めとし、同志門弟の多い信州へ出向いてくるが多かった。志都児もその一人。彼は明治十四年北山湯川の生れ。本名、円太。左千夫に心酔し、その入信には必ず行を共にした。明治四十二年、左千夫の入信を同志が松本に迎えたのは八月二十二日。翌日、赤彦の止宿先広丘へ三人して向った。

二十五日、諏訪に入りて蓼科の温泉に浴す。志都児又随ふ。滞留数日、予は蓼科山に老を籠らむと思ふ心いよいよこひまざりぬ。

これは左千夫自身の詞書き。碑歌二首もこの時詠せられた。左千夫のために山荘の用材を志都児が伐りだす手はずまで話がすすんだ。実現を見るに至らず、大正二年に左千夫は永眠した。時に五十歳。その後五年、志都児も三十八歳の若さで後を追った。

ここから目を北にやると、雪の白い霧ヶ峯のなだらかなスロープ。ずっと西の空際、もやの中に光っているのは木曾御岳。南に木曾駒連峯。さらに南に甲斐駒。吹きつける風に顔をさらしてあかす眺める候……。も一と碑を眺め直し、おもむろに尾根をくだりだす。松の梢を風が騒がせている。



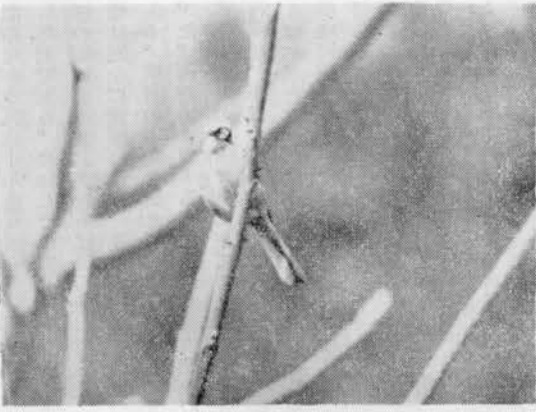
ベニマシコ

長沢修介

一面の銀世界となつてしまふ林の中を歩いてみても小鳥の数がすっかり少なくなつて、まれに出合うカラ類の群も淋しく、ただ生きることにより一生懸命で、小枝から小枝へとエサ探しに余念がない。

そんな淋しい林の端の数の中にヒ、ヒ、ヒと小声で鳴きながら一羽のベニマシコが寒むそうにふくらんでいた。

北海道辺りで生れたらうこの鳥は、秋には二十羽位の群で渡り生活するそうであるが、十月下旬頃当地に飛来する頃はいつも一〜二羽で見る事が多い。今迄に出合つた一番大きい群で七羽であった。体の割に大きいんだ声でヒ、ヒ、ヒ、ヒと鳴き長い尾をヒクツ、ヒクツと動かす。三月頃の渡去期にはもつと長く美しい声を聞かせ、一番でいることが多い。



博物館 ニュース

高橋秀男学芸員退職

本館に十一年余勤務してきた高橋秀男学芸員は昨年の十二月三十一日付で当博物館を退職した。そして一月一日付をもって神奈川県立中央博物館(仮称・四十二年開館予定で現在準備中)準備事務局に就職した。

高橋学芸員は本館では展示部門、植物部門特に高山植物や、陰花植物に詳しく又、写真技術においても優れ「山と博物館」の表紙をいつも飾っていた。

又登山関係においても「大町山の会」に属し、夏季の知床半島縦断(横浜大)にも参加。針ノ木岳周辺のバリエーションルートの開拓などにもその力を發揮し、自然公園指導員全国山岳連盟二種指導員として自然保護、遭難救助活動など広い分野において活躍していた。住所 東京都大田区田園調布、四の二七 佐々木方

表紙説明

タル沢より初冬の銀岳

撮影 武田 睦男

山と博物館 第十巻第一号

一九六五年一月二十五日発行

発行所 長野県大町市TEL(大町)二二一

大町山岳博物館

印刷所 大町市上仲町

信州印刷大町工場

お願い 「山と博物館」の購読者をつのつておられます。年間三〇〇円(送料共)大町山岳博物館宛お送り下さい。